平成 23 年 12 月号　№ 422

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話 (043)485-1801

地方で頑張るモノつくり屋さん ---　辰巳洋司
気にいっていた傘 ----------　篠原恵子
「水彩仲間 18 作品展」を訪ねて--　宮岡講治
秀次と瑞泉寺 ----------　小池由美

学ぶ・習う・楽しむ

森山義信

定年退職後の人生は、第二の人生とかセカンドライフと呼ばれている。セカンドライフには、仕事をしばらく続けるか、それとも引退して他に何かをやるか、という大まかに二つの選択肢があると思う。

私は働ける間はずっと働きたいという気持ちと、可能ならばそのまま引退したいという気持ちが揺れ動いていた。退職となり求職活動を始めたものの、若い人達でさえ就職氷河期の時代である。私は職業生活に終止符を打ち、生涯学習を中心にした余生を楽しむ道を選ぶことにした。

思い起こせば、若い時から地域の行政や団体が主催する学習講座やスポーツ講座等によく参加していた。東京都大田区に住んでいた独身時代は、公民館で開かれていた成人学級で「心理学」や「英会話」、「話し方教室」などに参加した思い出がある。

佐倉市には公民館、図書館、コミュニティセンター等の公共施設が多く、質の高い学習や練習が行われており参加には事欠かない。「こうほう佐倉」や各施設に置いてあるパンフレット等で、何が、いつ行われるかを知りカレンダーに書き入れる。5月に入学した市民カレッジの予定、通信制大学院の授業の視聴やテストの日程、孫3人の幼稚園、保育園の行事や、面倒をみる日程なども加えると一ヶ月の予定がほぼ埋まってしまう。

健康の維持・増進についても専門家に習うことが大切であると思う。最近参加したものでは、食生活改善推進員による「料理教室」、市役所生涯スポーツ課主催の「ヨガ教室」と「キックボクササイズ」が良かった。料理は毎日台所に立つのも苦にならなくなった。キックボクササイズは、還暦の私には少々きつかったが、若い頃空手を習っていたので違和感はなく、パンチやキックの感覚もよみがえり楽しく汗をかくことができた。

学んだことが身についているかどうかは第三者に評価してもらわないと判らない。評価を受けることは嫌なものだが、あえて自分に課してみるのも刺激になると思い、大学院の単位認定試験を年に2回受けている。4段階評価で3番目という成績ばかりで習熟できていないことを痛感させられ、がっかりしてしまう。これが今の私の現実だと納得するしかないが、カレッジを卒業する4年後には、何か地域に貢献できるようになっていたいものだ。「継続は力なり」を信じて生涯学習社会を楽しんで行こうと思う。

（編集委員）

地方で頑張る モノつくり屋さん

東武線浅草駅から特急で栃木県の新鹿沼駅まで行きますと、さすがに田んぼや畑の景色が拡がって来ます。車でさらに行きますと小さな工業団地があります。以前は活気のあったこの界隈も、中小の金属加工業者は長引く不景気と仕事を出してくれていた発注元が、中国やタイやベトナムなど海外に移って行き、注文は減少しています。さらに円高で加工賃の厳しい値引き要求に耐えられず、撤退する会社も増えています。

そのような厳しい市場環境のなかでもこの団地の中に自力で頑張る地方のモノつくり屋さんがあります。昭和28年に創業した精密機械部品製造業の会社です。今は三代目の若社長さんが毎日油まみれになって工場に入り、46名の社員と共に常に創意工夫をモットーにして作業に取り組んでいます。どのメーカーも難しくて断るような注文も断わらずまず率先して取り組んでいます。このような努力をコツコツと積み重ね今では環境対応自動車エンジンの部品や先端医療器機の重要部品つくりに貢献しています。仕事の注文も年々増えています。

農業従事者には戸別補償制度や主要農産物の輸入に対する高い関税やＪＡのような組織化された団体の支援がありますが、このような小さな金属加工会社は専ら自らの実力で台頭する韓国や中国のメーカーと闘っています。社員一人一人の意欲が力です。昨今は若い人の就職難が社会問題になっていますが、会社の規模などにとらわれず本当に仕事にやる気になって取り組む人がいれば、地方の中小の会社は歓迎しますし、地方の活力向上に貢献することになります。

（稲荷台　辰巳洋司）

「水彩仲間18作品展」を訪ねて

6月18日の梅雨空の合間、臼井公民館の展示室へ「水彩仲間18作品展」を見に行った。

受付での記帳をすませ、出品目録と作者当てクイズなる配布物を手渡され会場内を一廻りしてみた。会場の隅にはクリスタルグラスと大振りの壺にオリエンタルリリーとカサブランカが活けてあった。女性会員の多き故か奥床しさが醸し出されていた。

作品は各人3点ずつ、自画像、静物、風景という課題の元、54点が出品されていた。

各自画像には題名のみで作者名は無い。受付で渡された作者当てクイズに解答してもらうという仕掛けらしい。

題名のつけ方には個性が出る。「今の私」「自分再発見」「絵筆を握った男」「微笑（ほほえみ）」「ゴルファーよっちゃん」等々思わずニンマリさせられるネーミングもあり、上手いと思った。作者当てクイズでは3名の記入に迷ってしまった。カレッジ18期生のある人曰く「女性陣の作品は若々しく、男性陣のそれは年相応ではないか」と、言いえて妙である。迷った3名とは女性であった。

それぞれの静物・風景画には題名と作者名が添えられていた。上手な人は上手に、そうでない人はそれなりに…、期待して入った方には少なからずその意に添えなかったかもしれない。しかし、出品作品には須（すべから）く個性が出ており良く描けていると思った。

本作品展の挨拶文に「数名を除く殆どのメンバーが絵筆を握るのは小学生以来で全くの素人集団ですが、最近ようやく絵を描く楽しさが解ってきたように思います」とある。第2回目以降の展示会に期待しつつ楽しい一時を過ごして会場を後にした。

（大蛇町　宮岡講治）

気にいっていた傘

先日、ガン検診の為ある病院へ行った。その日は雨が降っていたので、傘をさし、病院の玄関まで行き、「確かにここに入れた」と心の中で確認をし、傘立てに傘を置いた。

およそ一時間後検診が終ったので帰ろうと思い玄関の傘立てに行った。すると、確かに傘立てに置いたはずの私の傘がない。あちこち見回したが、とうとう見つからなかった。幸い、帰る時はもう雨がやんでいたので、傘がなくても大丈夫だったが、とても、残念に思った。

「私の傘を持って行った人は間違えて持って行ってしまったのかなー。それとも、自分が困って持っていってしまったのかなー。もし、持って行ってしまったとしたら、持っていかれた人が困るとは、思わなかったのかなー」といろいろ考えた。

また、「その時その人は、私の傘がどうしても必要だったのだろう。しかたがないなー」とやさしい気持ちになったり、「人の困るのも考えずだまって持っていってしまうなんて…」と思ったり、複雑な思いが頭の中をめぐりめぐった。

そして、一週間後、また同じ病院へ検査の結果を聞くため行った。「もしかして、この間の私の傘が元に戻っているかもしれない」と微(かす)かな期待を持って傘立てを見たがなかった。

花柄の模様の水色の傘で、気にいって購入したものだったので、今でも、ふと「あの傘は、今頃どうしているのだろう」と思うことがある。

「大事に使われていますように…」。

（鏑木町　篠原恵子）

秀次と瑞泉寺

豊臣秀次は高野山に送られ切腹しました。文禄４年（１５９５）のことであります。その半月後に秀次の子女、妻妾三十余人が処刑されました。昨年秀次と三十余人が眠る「瑞泉寺」を訪れました。

京都三条大橋の南西にある寺は大橋近辺の賑わいとは違い夕闇迫る中、静かに時を刻んでいました。秀次の墓を囲み三十余の墓が整然と並んでいました。ＮＨＫ大河ドラマ『江』の中で一瞬映しだされた映像があり、私はあまりの惨(むご)さに心を痛め手を合せました。

この地が鴨川の河原であった時、大きな穴を掘られその中に投げ込まれ「殺生塚」と呼ばれる塚が作られたとか。秀次の首を「石びつ」に入れ見せしめにしたとか。

その中の一人、悲しい薄命の最上義光(よしあき)の姫「駒姫」のことを忘れることが出来ません。

秀次は天正19年（１５９１）奥州仕置の時に山形に立ち寄り、駒姫を是非にと求めました。義光はいずれ関白になる秀次の申し入れを断ることもできず、駒姫が京に上ってすぐに、15歳の命は消え失せました。『罪(つみ)をきる弥陀(みだ)の剣(つるぎ)にかかる身のなにか五(いつ)つのさわりあるべき』という辞世の歌が残っています。

この事から16年の歳月が流れ、秀吉の13回忌を迎え「方広寺大仏殿」再建の資材を運ぶため、豪商角倉(すみのくらけ)家に高瀬川開削工事の許可が下りました。角倉家は荒れ果て壊れていた塚の地に寺と墓所を創建し、弔いました。住職はこの事件の真相はわからないと書いています。時の勢力に呑まれ泡のように消えていった命。

命を尊ぶ世の中を構築することが私達にかせられた課題だと思います。

（西志津　小池由美）

12 月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL０４３－４８５－１８０１

〒２８５－００２５　佐倉市鏑木町１９８－３

さくら道

「響きますか」と聞かれる。「いや未だです」と応えると少し残念そうである。響くとは、鍼が刺さった時にツボへの刺激が経絡を通して瞬時に体中に伝わる為にピリピリッと電流が通じた様に感じられる事である。

ここは、鍼灸院。鍼や灸によって気・血・水を活性化させる。気は元気、気力の元である生命エネルギー。血は酸素や栄養を体に行渡らせ、水は体の免疫力をになうリンパ液や生命のもととなる。

西洋医学の発達により、感染症に対する抗生物質が発見され、寿命は飛躍的に延びた。しかし、生活の複雑化によるストレス、冷房、加齢、過労、運動不足などから体調を崩す要素は増えている。

体全体を整え、自己免疫力を増す鍼灸はもっと認められても良いのではないかと鍼を打たれながら考えた。

（横山詔正）

あとがき

モノつくり社会の厳しさが伝わってきます。熾烈な競争の連続だと思います。しかし、長年の努力の結晶である、独自の技術やノウハウがあります。流出しないように、後継者にしっかりと伝承して頑張って頂きたいですね。

自画像の作品18点、皆さん夫々個性的な美男美女ですので、さぞかし華やかだったでしょうね。第2回目以降の作品展の開催が楽しみです。

どういう訳か、お気に入りの傘がなくなるんですよね。私も3回経験があります。今は専ら安価なビニール傘にしていますが、何か物足りなさを感じますね。

秀次が秀吉の養子でなかったら、恐らく追放されて切腹、また子女、妻妾の処刑もなかったでしょう。15歳の短い命だった駒姫、何とも不憫です。

ご投稿、ご愛読の皆様、今年もありがとうございました。

（鵜木聖次）